相模経済新聞　2022年5月20日号

宇宙生命哲学

ことはじめ

45

北里環境科学センター
名誉顧問／宇宙生命哲学者
伊藤　俊洋

相模原市から世界へ平和のメッセージを

「フォトシティーさがみはら」は、写真・映像を通じて、社会に豊穣な文化を発信する創設20年の歴史と伝統を誇る団体である。私は、2010年から実行委員として活動に参画し、当時、当会の会長であられた加山俊夫相模原市長に「相模原市から世界へ平和のメッセージを届けよう」との提言を行った。あれから12年、地球上は新型コロナパンデミックとロシアーウクライナ戦争で空前の混乱状態にある。また、昨年は、「民間人による宇宙旅行元年」の呼び声の元、人類の宇宙への関心が極度に高まった年でもある。当時の提言を振り返って、今、何ができるか考えてみたい。

相模原市は、宇宙研究開発の中心的役割を果たす宇宙航空研究開発機構（JAXA）を誘致し、銀河連邦加盟7カ国（北海道・大樹町、秋田県・能代市、岩手県・大船渡市、長野県・佐久市、神奈川県・相模原市、鹿児島県・肝付町）の1つとして、世界に存在感を示している。政令指定都市に移行して12年、「宇宙研究都市相模原」として、世界に平和のメッセージが送れたら良いと思う。

「満地球の出」（2008.4.6）高度100kmの月周回観測軌道上で月周回衛星「かぐや」ハイビジョンカメラが撮影

1例として、定期的に宇宙から地球の映像を世界の茶の間に発信し、地球は1つ、人類は1つの家族、環境は護るもの、美しい自然は自分たちで護るものという認識を、人類共通の根源的概念として醸成する。

具体的には、テレビの朝・夕のニュースの時間帯に60秒ほど、人工衛星から見たライブの丸ごとの地球の映像と、世界各地の都市や田園風景を中心に、人間社会の平和な生活状況、神秘的な生命現象を組み合わせ、放映する。BGMや、画面背景の字幕には、人類が残してきた文化芸術の遺産を使用したい。

そのような事業を、相模原市が中心になり、銀河連邦加盟国を皮切りに、全国各地に広げられないだろうか。さらに、世界規模で各国の宇宙研究・開発都市とネットワークを構築して、国際的な文化育成事業として世界に発信し、人類の連帯意識の高揚、新しい地球文明の創出、地球環境防衛隊構想の実現、持続可能な文明社会の構築などを目指したい。既に、常時YouTube上で、ISSから見た地球の映像が見られるが、大切なことは、明確なコンセプトを持って恒久平和に繋がるメッセージを世界へ送ることだと思う。この事業により、多くの人が地球環境に深刻な負荷をかけて宇宙旅行に行かなくても、地球の素晴らしさを居ながらにして体験できるだろう。